

## 白眉家の休日

「なんであたしも一緒に来なきゃいけないんだよ」

「しつこいわよ、魍呼ちゃん。たまには親子水入らずの週末を過ごすのも良いでしょう」

「だったら、魍皇鬼と二人で来いよ」

「親子でって言ったでしよう？少しは親孝行しても罰は当たらないわよ」

「あたしはお前の事、母親って認めてねえぞ」

「何か言った？」

ぼそりと呟く魍呼の顔を鷺羽がチラリと睨んだ。魍呼はバツが悪そうに、あらぬ方向に視線を向ける。

思えば嫌な予感朝からしていた。にっこりと鷺羽が微笑んで、

「魍皇鬼が絵本を欲しがってるから、一緒に街へお買い物に行きましょう」

と、昼頃に言われた時には背筋がゾツとした。だが、魍呼が逃げるよりも早く、鷺羽に捕まり、有無を言わず、街行きのバスに押し込められたのだった。

魍呼は心の中で溜め息を吐いた。週末の街は、若い男女が手を繋いで笑い合ったり、何かを言いながら愉しそうに歩いている。自分はいええ、強引な母親と、何が嬉しいのやら分からないが、ニコニコとしている妹と一緒にただ本屋を目指して歩いているだけだ。

「天地、何してるかなあ…」

天地と二人で手を繋いで歩けば、賑やかな人混みの街も変わった景色に見えるだろう。笑顔で送り出してくれた天地の顔がよぎり、魍呼は一瞬切なくなった。

「そんなに天地殿の事ばかり考えてると、体に毒よ、魍呼ちゃん」

「なっ！お前、またあたしの心の中覗いただろう、」

「違うわよ。あんた、顔に出やすいから何考えてるかすぐにわかるのよ。それに今、口に出して言ってたし」

すかさず鷺羽に切り返され魍呼は赤面した。ははと笑うと、鷺羽は魍皇鬼に手を引かれ、本屋に入って行った。どうやら、キョロキョロと歩いているうちに本屋へ着いたらしい。

「くそ、鷺羽！」

悪態をひとつ吐くと、魍呼も二人の後を追ひ、本屋の入口を潜った。

砂沙美が本を読んでいることが多いからか、美星に読んで貰う事が多いからか、魍皇鬼は絵本を読むのが好きだ。天地が小さい頃に読んでいた絵本を、信幸の書庫で見つけては美星や鷺羽のところに持って行き、膝に抱えられて読んでもらう。

「でも、もうその絵本古いでしょ？」

今日の午前中、いつも通り鷺羽に絵本を読んで貰っていると、通りかかった天地が声を掛けた。鷺羽が魍皇鬼の頭を撫で、

「魍皇鬼、ママとお姉ちゃんと、絵本買いに行こうか？」

と、尋ねて来たので、魍皇鬼は大きく頷いた。

そして今、彼女は熱心に絵本を選んでいる。

「どの本だっけ同じだろう？」

すでに飽きて来た魍呼が魍皇鬼をせつつく。魍呼はお化けの絵本やら、鬼の絵本やら妖怪の絵本を魍皇鬼に押し付けた。

「ほら、これにしるよ、これ面白いぞ、きつと」

「みやあーん」

「やめなさい、魍呼ちゃん。そんな怖い本、魍皇鬼は喜ばないわよ」

「ちえ、面白いと思うんだけどな…」

魍呼は渋々、絵本を棚に戻した。魍呼の見せる絵本が恐くて、抱きついて来た魍皇鬼を、驚羽がやりわりと絵本に促した。

「ほら、魍皇鬼、この絵本はどう？砂沙美ちゃんに似た女の子がお母さんのためにおつかいをする絵本みたいよ。ほら、こっちはうさぎさんがケーキを焼いているわ。あんたの好きなニンジンケーキね、美味しそう」

「みやああん」

「こっちも面白そうよ、お風呂の石鹸が冒険するお話。これは働く車が出てくるけれど…あんたにはちよつと難しいかもね」

魍皇鬼の目線に合わせてしゃがむと一冊一冊、手に取り、驚羽は魍皇鬼に見せてやった。

魍皇鬼は真面目な顔で絵本を見比べ、頁を捲り、絵を眺めている。

「ふあああ。つたく、どれもこれも同じだろう」

痺れを切らし、大あくびをしながら魍呼が言う。

「ちよつと待つてなさい、魍呼ちゃん。今、魍皇鬼選んでるんだから」

「んだよ、お前があたしを強引に連れて来たんだろう」

魍呼は舌を出して驚羽に文句を言ったが、驚羽はもう魍呼の方を見ていなかった。魍皇鬼が絵本を選んだのだ。

「あら、これにするの？本当に、あんたはニンジンが好きね」

魍皇鬼が選んだのは、うさぎが大きなニンジンケーキを抱えている表紙の絵本だった。

「みや、みやみやみやーん」

魍皇鬼は絵本を抱きしめて目を輝かせた。

「分かったわ、お金払って来るからね」

驚羽は、魍呼に魍皇鬼を託すと、会計しに行った。魍呼はこれでようやく解放されると思い、やれやれと溜め息を吐いたが、満足そうな顔をしている魍皇鬼を見ると、何だか面白くなくなった。

「おい、魍皇鬼、あの絵本な、本当はあのうさぎが喰われる絵本だぞ」

「みやん」

魍皇鬼は首を振る。

「本当だぞ。あのニンジンケーキは妖怪で、夜になったらうさぎを喰っちゃうんだぞ」  
「みやあん」

「こーんな大きな口でさ…」

魍呼の話を聞くまいと、魍皇鬼はかぶりを振っていたが、魍呼が大きな口を開き、牙をむき出しにしたので、ついに魍皇鬼は恐怖に慄き泣いた。

「全く。恥ずかしい子なんだから、魍呼は」

魍皇鬼の泣き声と、魍呼の高笑いが会計場まで聞こえて来て、鷺羽は情けないと溜め息を吐いた。ふと見ると、会計の横に「ごほうびシール」というものが売られていた。シールには「たいへんよくできました」と書いてある。

「すみません、これも下さい」

泣きながらも魍呼に耐えた魍皇鬼に後であげよう。きっと喜ぶだろう。鷺羽は魍皇鬼の笑顔を思い浮かべて、ふつと微笑んだ。

「さ、魍皇鬼の用事は済んだと」

「はあ？これで帰るんじゃないのかよ？」

「後は、ママの用事。珈琲の豆が無くなっちゃったし、砂沙美ちゃんに夕飯の買い物頼まれたのよね」

「…おい鷺羽」

「何？魍呼ちゃん」

「お前、親子水入らずで…とか言っておきながら、荷物持ちのためにあたしを連れて来ただけだろ？」

「何言ってるのよ。そういう訳じゃないわよ」

「けど、お前…」

「さあさ、買い物買い物。魍呼、あんたの欲しい物も買ってあげるから、カゴに入れなさい。ただし、お酒は駄目よ。あたしが天地殿に怒られるからね」

鷺羽はそれだけ言うと、魍皇鬼にカートを押させて、スタスタと行ってしまった。腑に落ちない、実に腑に落ちないと思いつつも、魍呼はまたしても二人の後を追った。

「みやあん、みやんみやんみやん」

砂沙美に頼まれた味噌を鷺羽が選んでいると、魍皇鬼が何度も話し掛けて来た。

「魍ちゃん、ちよつと待って…こつちとこつち、どちらのお味噌だったかしら？」

「みやあんみやんみやん」

「…お菓子売り場なら、これ選んだらすぐに行くから。ちよつと待ってね」

だが、鷺羽は味噌を決めかねている。魍皇鬼は涙目だ。

「ああ、分かった分かった。魍呼がその辺に居るから、お菓子売り場に先に連れて行って貰いなさい。ママも此処が済んだら行くから」

「みゃん！」

魍皇鬼は顔を綻ばせると、駆けて行った。数分後、酒の肴のパックを手にした魍呼が驚羽の元へ来た。

「あれ？魍皇鬼は？」

「魍呼ちゃんと一緒じゃないの？」

「……………」

数秒顔を見合わせた二人は、すぐさまお菓子売り場に向かったが、そこに魍皇鬼の姿は無かった。

「おい、驚羽、あたし、外見て来る」

「待ちなさい、あの子は外に一人で行ったりしないわ。魍呼ちゃんはお野菜売り場見て来て。あたしは、惣菜売り場を見て来るから」

分かった！と言うなり、魍呼は瞬間移動した。天地が此処に居たら魍呼を叱つただろうが、迷子になった妹のため仕方ない。驚羽は見過ぐすことにした。

ぐるぐるとカートを押しながら、驚羽はスーパー中を探したが、魍皇鬼の姿はおろか、魍呼の姿も見当たらなかった。すると、特売品売り場で、泣いている魍皇鬼の姿が目に入った。

「魍皇鬼！」

駆けて行くこうとすると、魍皇鬼の目の前には魍呼が仁王立ちをして、誰かと睨み合っていた。驚羽はそつと、その様子を見守ることにした。

「うちの子、その子に突き飛ばされたんですよ」

かな切り声を上げて、魍呼に文句を言っているのは、どうやら母親らしい。その母親の子どもと思われる男の子が母親の後ろに隠れて泣いたふりをしている。

「先刻から言ってるんだらう。魍皇鬼はそんな事しねえよ」

「あなたがそう思いたい気持ちには分かりますけど、実際、うちのダイちゃんが…」

「勝手に転んだだけだろう？」

男の子は、あつかんべーと舌を出した。瘤に障った驚羽は、やはり自分が出る幕かと前に出かかった。だが、魍呼は一步も怯まず、声も荒げずに、冷静な口調で、

「大体な、男が菓子の奪い合いごときで泣くんじゃねえよ。そんな弱つちい男で、どうするんだよ。ビービー泣くなんてみつともねえ。男なら、大きく構えてるよ。それと、あんたもギャーギャー子どもの喧嘩に首突っ込んで恥しくないのか。母親なら、大きな目で見守ってやれよ。せこい喧嘩しか出来ない奴は、その程度の男にしかならねえぞ」

溜め息交じりでそう言うと、泣いている魍皇鬼を抱え、

「お前も菓子を取られそうになったからって泣くなよな」

ガシガシと乱暴に頭を撫でると、さっさとその親子に背を向けてこちらへ来た。驚羽は言っていることは少し強引だと思いつつも、娘を迎えた。

「なんだよ、お前いつから見てたんだよ」

照れ臭そうに魍呼はそっぽを向いた。

「ふふ、良い演説だったわよ、魍呼ちゃん」

「莫迦野郎。ほら、こいつ、どうにかしろよ」

魍呼から魍皇鬼を抱きとると、鷺羽は魍皇鬼の頭を優しく撫でた。

「魍皇鬼は乱暴なんかしないって、ママもお姉ちゃんも分かっているから、もう泣かないの。いい子だから、ねっ」

「みゃあん」

ぎゅっと鷺羽に魍皇鬼がしがみついた。

「ほら、こいつの持つてる菓子、買うんだろう？」

魍皇鬼が力を入れて持っていたせいで、菓子の袋はぐしゃぐしゃになっていた。鷺羽は苦笑いをしながら、魍呼に菓子と財布を渡した。結局、あたしが払ってくんのかよ、と、魍呼は悪態を吐きながら、カートを押して、会計に向かった。

「へえ、じゃあ、魍皇鬼、三人で手を繋いで帰って来たのか？」

その夜、魍皇鬼は身ぶり手ぶりを交えて、今日一日の事を天地に話した。

「みゃあ！みゃんみゃんみゃん」

魍皇鬼の言葉を全て理解は出来ないながらも、笑顔で話す魍皇鬼に天地は頷いた。

「楽しかったんだね。良かったね、魍ちゃん」

一緒に話を聞いていた砂沙美も、魍皇鬼に笑顔を向けた。珈琲を飲みながらそれを聞いていた鷺羽は、カップを置くと、そうだと思出し、本屋の袋から「ごほうびシール」を取り出し、魍皇鬼に渡した。

「頑張ったご褒美よ、魍皇鬼」

「みゃああん」

「魍ちゃん、良い子にしたからだね」

大喜びでシールを見せる魍皇鬼に砂沙美は優しく言った。

「良かったな」

天地も目を細める。鷺羽は温かくその様子を見ていたが、魍皇鬼に声を掛けると、

「お姉ちゃんに貼ってあげな」

と促した。魍皇鬼は首を傾げていたが、あっという表情になり、ソファで寝ている魍呼の元へ行った。

「魍呼にご褒美…ですか？」

天地に訊かれ、鷺羽は頷いた。

「そ、頑張ったのよ、魍呼ちゃんは魍呼ちゃんで」

「ふーん」

魍皇鬼はそっと魍呼の顔を覗くと、魍呼の頬にシールを貼った。

そして、鷺羽の元に戻ってくると、鷺羽の膝に座り、今日買って来た絵本を広げた。

「魍呼ちゃんが守ってくれたのよね、ね、魍皇鬼」

「みゃん！」

「…魍呼が街へ行くとか何かと騒動になるかと思っただけですが…」

「あら、うちの子は、良い子よ天地殿。皆、大事な良い子よ」

そっと呟くと、鷺羽は膝に乗せた魍皇鬼の温もりを感じながら、絵本を読み始めた。